

私を殺して？

人間

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ザックとレイのその後の妄想。

目次

ねえザツク。

ねえザツク

アア？

私を殺して？

そんなに殺してほしいのか？

うん。

だったらちったあい顔してみろってんだ。

うん。

.....

「ザツク」

「んあ？……あ？……？んだその顔」

「殺したくなつた？」

「ならねえよぶつ殺すぞ!？」

「ありがとう」

「殺さねえよ!!!」

あの日。

あのビルから脱出した後、ザツクが迎えに来てくれた夜。

警察から逃げて、周りの人から怪しまれないように、遠く……遠くまでザツクと一緒に逃げた。

私も聞いたことがないような、地図に乗っているのかも分からないくらい小さな村。

小さな池の畔を囲むようにある家々、そこに住む人は皆おばあさん

かおじいさんだ。

少しでもバレないように長かった髪の毛は方の辺りでバツサリと切り、ザックもあのパーカーじゃなくて私がザックのために作ったパーカーを着ている。

でも、包帯ぐるぐる巻きの時点ですごく目立っちゃうかもしれないのは気にしたらいけないのかな。

そして、あの約束。

私を殺して

その約束は、未だ果たされていない。

「ねえザック」

「あん？今度はなんだよ？」

「どうして殺したくならないの？」

「そんなもん、鏡見てから言え！」

おかしい。

「ザック」

「……………？つ変な顔すんな馬鹿野郎」

「……………」

私はきちんと笑えているはず、ザックと一緒にいる、それだけで嬉しくて。

それなのになんで殺してくれないの？

ザックは神様じゃない。

でもあの時、連れ出す時も、私を殺すと言っていた。

ザックは嘘が嫌いなはず。

それじゃあいつも言っているいい顔をするっていう手順を踏まないで殺してもらえない？

「……………ムウ」

「はアアア……んな疑わしそうな目でこっち見んな!!」

「じゃあ、どうしたら私を殺してくれるの? もう2ヶ月以上も経ってる」

「だからお前死ぬ時あいい顔しろつつつてんだろ? でなきや」

「いい顔って?」

「そんなもう……こう、あれだよ! 殺したくなる顔に決まってんだろ!!」

「誤魔化した?」

「誤魔化してるわけねえだろ!」

「そう」

そう言つて誤魔化すザツク……こんなやり取りにも、幸せを感じる。

それでも私は死にたいには変わらない……いい顔というものが分からないけれど、殺してもらうまでは、そのいい顔をできるようになるまでは、こんな日々を過ごすのもいいのかもしれない。

「……………んだよ、出来んじゃねーか」

「何か言った、ザツク?」

「ばーか何でもねえよ」

「できてたんだ」

「聞こえてたのかよ!？」

「殺して?」

「へっ、じゃあいい顔してみろつての」

「ん」

「……………お前笑うのヘツタクソだな」

おかしい。